

紙の素材から発展する造形材料の視覚的媒体を通じた表現効果

－「描く」「作る」による活動と混合材料の実践から－

渡 辺 一 洋 佐 塚 公 代

1. はじめに

幼児が身近な紙に絵を描いたり、紙を丸めて見立てたりする行為は、日常生活の中で多く見られる光景である。幼児の身の周りにある自然環境に目を向けてみると、形や色彩が溢れ、樹木や花、あるいは光の中には、保育に取り入れることのできる造形のアイデアが多く含まれている。幼児の身近な環境の中から造形活動に発展する素材を探求するとともに、幼児の造形活動について見つめ直していくことは現在より一層求められている。

例えば、幼児の描いた絵の中には、純粋な感動が詰め込まれており、出会った植物や動物あるいは遠足や季節の行事への思い出や視点がのびのびと表現されている。このように、幼児の生活と環境、造形は密接に結びついており、その中から幼児の感性をどのように育てていくかが保育者の実践計画の手がかりになっていくことが考えられる。

21世紀は「感性」の時代ともいわれているが、幼児の柔軟な感性は造形活動を通して、多くの可能性を発揮することができる。しかし、そこには、その表現を引き出すための環境、教育方法、教育材料、教育する側の従来有効とされてきた関わり方を踏まえることはもちろんのこと、さらには、新しく創造的な造形表現を探求しようという試行錯誤も必要となる。

原始時代から人類は洞窟に絵を描き、石や木で何かを作るといった活動を続けてきた。古代の人々にとって芸術的な表現は生活に潤いを与えるだけでなく、人間の営みや文化を伝え、創造力を養う重要な意味を持っていたと考えられる。それらは、時空を超えて、今日まで途絶えることなく、

私達現代人に引き継がれ、多様化した芸術表現も数多く生まれてきている。

幼児の造形活動の特性として、原始時代のような大地に根ざしたダイナミックな行為が見られるとともに、そのこと自体が感性を形成するためにも重要な経験であり、発達段階を豊かに形成していく時間でもある。そこで、本研究では、紙の素材を通じたいくつかの実践において「描く」及び「作る」という観点から、紙を用いた素材の実践について、紙素材と感性の形成、表現効果、その視覚的要素について、混合材料を含めた実践も加えながら、有効性を明らかにする。

2. 表現する行為の特徴

表現は、一般的には「内面的なものを、外面なものとして客観化すること」であり、「顔の表情・ジェスチャーなどの身振り、言葉、造形物」を主として客観的な形象になっていく。ここでは、人間独自の感性から成る個人的な視点が混ざることによって十人十色の表現が現れる。

人間は、「思い、考える」ということを脳内で複雑に連鎖させるが、それらは表現されることによって、他者へ始めて伝達することになる。また、言葉に含まれる意味としては、次のように整理することができる。

表 → 表出、心の中にあるものが外にあらわれ
ること。

現 → 出現、実際にあらわし出すこと。

幼児の生活と遊びは造形活動にとって関わりが

深く、その幼児がどのような生活環境や地域風土で過ごしているかは、造形作品になる時に多くの影響を与える。例えば、自然豊かな場所と都市部では、季節の変化や文化、生活スタイルが子どものイメージを形成すると考えられる。保育者にとっては、幼児が表現した作品からイメージやメッセージを読み取り、その幼児がどのようなことに興味を抱き、感性を現しているのかについての読解をすることによって、円滑な造形活動を展開することができる。

また、時として表現は、日常体験を基にした心の中の大きな喜びだけでなく、満たされないモヤモヤした思いを映し出すことがある。そのため、関わる幼児の体調や状況を見据えながら、柔軟な造形指導を計画することが求められる。

3. 幼児の発達段階と造形表現の特徴

1) 幼児の造形活動と感性の関連性

幼児は、「満1歳から小学校に就学するまでの子ども」を示すことをここで改めて確認しておく。0歳児の乳児は、物体を見て、それを見つけるとハイハイをしながらその物体をつかんで感触を確かめ、さらには、それを口に入れて舐める行為をする。筆者が行った親子活動の一場面を紹介すると、0歳7か月の乳児（男児）に鉛筆を握らせ、手を握って一緒に紙に描画をした後、乳児だけで別の紙に描画できるように設定した。すると、乳児は鉛筆を4、5回、紙にたたきつけて投げた。その後、紙への鉛筆を用いた描画に興味を示すことはなかった。

この一例のように、0歳児の乳児にとっては、描画という行為への表現的意味をもちにくく、描画行為に発展しにくい発達段階であることが理解できる。一方で、生後半年がたった乳児であれば、紙をくしゃくしゃにしたり、まるくつぶしたりという行為はできるため、素材を楽しむ遊びを取り入れた造形活動をすることについては可能である。

ところで、21世紀は「感性」の時代ともいわれ

るが、幼児に「いろいろなものの美しさ」を見つめる感性を養うためには、生活の中にある環境から得る五感を通した情報が重要である。幼児は「つくりたい」「まるめてみたい」などの興味をもち、その時々思いを形にしながら、作品を作り、その後、大人に対して「見て見て」などとコミュニケーションを求めてくる。その際、返ってくる大人側の声かけやアクションによって、造形活動の方向性が左右されていく。

2) 多様な「表現」を受け止める

幼児は、何気なく手に取った紙やダンボールに思いついたままに描いたり、くっつけて形にしたりしながら、自分の表現したいことを試みようとする。それらは自発的に表現しようとする行為であり、ある意味ではどのような表現も許されるであろう。しかし、他者と関わる場合、その表現を受け止め、理解しようということからコミュニケーションが生まれる。すなわち、幼児が表現することは、その中に気持ちや言葉、思い出、時間、環境などの様々な要素が含まれている。

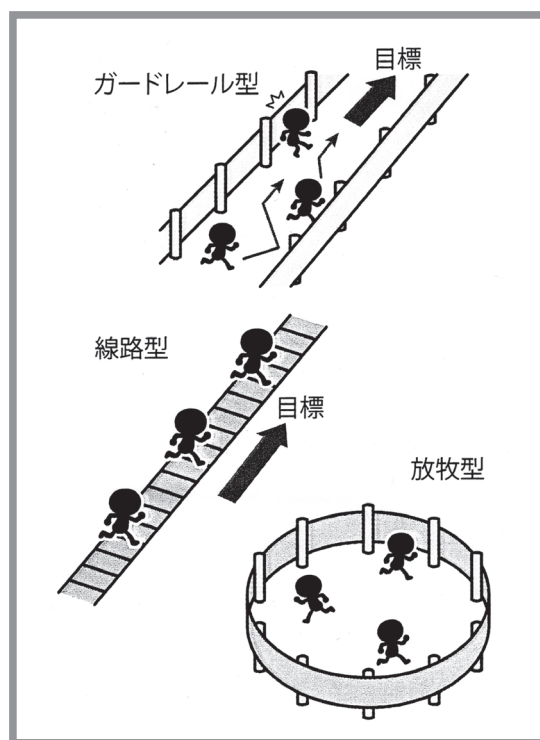


図1 様々な教育のアプローチ

また、教育方法のスタイルも現代社会の中で変化してきたといえる。図1¹⁾のような様々な幼児との関わり方が考えられるが、現代に求められる教育方法は、どのようなスタイルであろうか。図1の左下にある「線路型」は戦後に行われた日本の伝統的な教育スタイルであり、集団が1つの目標に向かって、同じ方角を目指してきたスタイルである。

「放牧型」はいわゆる「ゆとり教育」といわれるもので、ある囲いの中で放牧しながら、自由に教育を行うものである。これらの2つの教育方法は、期待をされつつも時代の変化の中で、ある面では、有効な結果が認められず、現代においては主とした手法ではない位置に置かれてきている。

この経過を踏まえて、21世紀の現代社会に期待

されているスタイルが「ガードレール型」といわれる教育方法である。ここでは、集団の中で1つの目標を置きながらもそれぞれの幼児へ寄り添い、各幼児に合った指導方法によって、最終的な目標を達成するものである。この手法は「ファシリテーション（促進する）」として、近年、注目されており、一方的に指導するだけではなく、幼児が自ら何かを見つけ出したり、問題の解決策を検討することの意義を見出している。

また、その場に関わって、活動を促進する教育者をファシリテーター（活動を円滑にコーディネートしながら、促進していく役割の人）と呼び、幼児の活動を豊かに育てていくことについて、さらに可能性が期待されている。なお、様々な教育者のタイプは、図2²⁾のように整理されている。

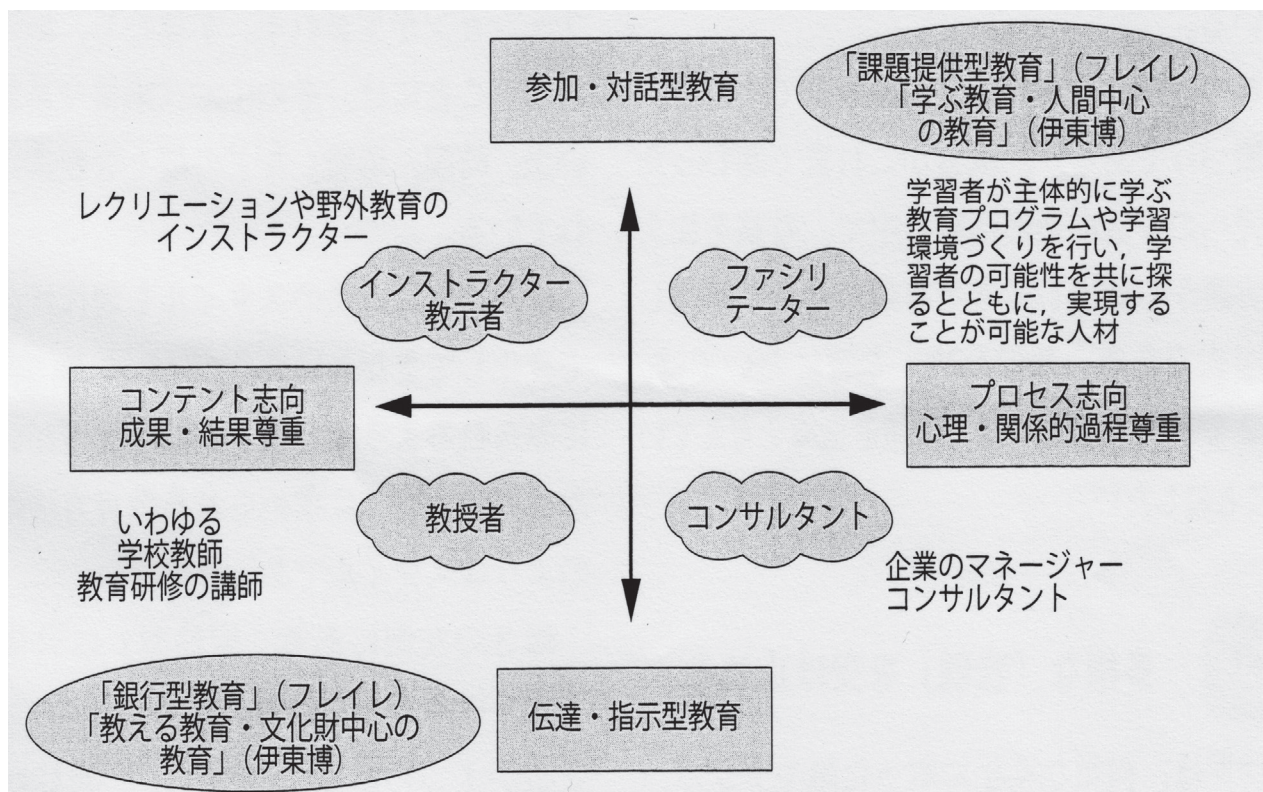


図2 4つのタイプの教育者像

4. 紙素材に幼児が「描く」表現について

1) 幼児が「描く」表現と発達段階

紙を目の前にすると、幼児は手元にあるペンやクレヨンで線を描き始める。それらは、潜在的な意識とも考えられるが、成長とともになぐり描きが円になり、やがて人物などの認識ができるような形の発展が見られていく。幼児が絵を描く時、その場に寄り添っていると、自分の絵についてお話を始めたり、説明をしたりする。

そこには、言葉が豊富ではない幼児が相手に伝えたい大切なメッセージや気持ち、希望や感動などが込められている。この時期の描画作品に大人側が共感したり、絵を通した豊かなコミュニケーションを行うことは幼児の豊かな成長へとつながるため、絵を読み取りながら、幼児の活動を支援することを大切にしていきたい。関連して、次に具体的な発達段階について、取り上げていきたい。

2) 幼児の絵画の特徴

1歳未満の乳幼児に描画材のクレヨン等を与えると、口に入れて確かめる行為があるが、成長とともに見守る大人側が、そこで口に入れないように注意をしていく時期はだんだんと少なくなっていく。場合によっては、その乳幼児期において、例えば、0歳後半から1歳児にかけて、描画材を与えると地面や壁に打ちつけたりした偶発性のある描画が描かれる場合がある。

この時期からやがて、本能的に何かを描くという行為に幼児期がつながっていく。人間が古代から続けている描くという行為には、どのようなメッセージがあるのだろうか。各幼児期の特徴をおさえながら、その魅力に迫っていくことにしたい。

日本において、戦後に影響を与えた思想家の一人は、イギリスの詩人・美術評論家で、美術教育の今日の基本的な考え方にもなっている「美術教育は芸術家の養成のためになされるのではなく、芸術を通して豊かな人間性を育てることに目的がある」という考え方を定着させたハーバート・

リード (Herbert Read, 1893-1968) である。『芸術による教育』(Education through Art, 1943) は日本でも広がり、当時の知覚心理学やゲシュタルト心理学などから最新の知見を援用しつつ、芸術が知覚はもとより、人間の思考、世界観の形成、行為の決定にまで深く関わっていることを示し、それゆえ芸術が人間形成にとって重要な位置を示すことを明らかにした。

さらに、リードの思想を継承したローウェンフェルド (Viktor Lowenfeld, 1903-1961) は、児童画研究の中で、児童画の発達段階と人間の成長と美術の有効性について分析した。代表的な著書『美術による人間形成 (Creative and Mental Growth)』(1947) はアメリカで出版され、今日も造形教育にとっての意義を示している。

ここでは、造形活動が人間の知覚、感情、思考の発達を促し、それによって知性と感性とのバランスの取れた人間を育成できると主張し、幼児が絵を描くという活動は、描く対象と情緒的關係を築くことから始まるとした。さらには、「知性と感性のバランスをもつ人間は、社会適応と協調性があるが、描くという行為自体が対象への深い理解と共感なしには成立しない」と述べた。

ローウェンフェルドは、発達段階に応じた表現様式の成長・変化という観点から児童画分析を行い、児童画の発達段階を、なぐりがき期 (1~4歳)・前図式期 (4~7歳)・図式期 (7~9歳)・ギャングエイジ (9~12歳)・疑似写実期 (12~14歳)・決定期 (14~17歳) の6段階に分け、それぞれの段階の特色を知的・情緒的・社会的・知覚的・身体的・美的・創造的成長という側面から詳しく分析している。今日、一般的に用いられている区分 (なぐりがき期・象徴期・前図式期・図式期)³⁾ は、ローウェンフェルドの影響が大きいと考えられる。

3) 幼児の発達と「作る」表現

描くと同じように「作る」ということも幼児に

とっては、様々な表現に発展する魅力的な活動である。「作る」ということには、あるプロセスに従って作る「工作」（折り紙やプラモデルなど）とプロセスの決まっていないテーマに沿って作る「造形」（絵具遊びなど）があることは前述したが、いずれもそれぞれの魅力がある。そこで、ここでは、「造形」という視点に着目しながら、年齢別の発達と「作る」という行為について述べていく。

幼児は、1歳半頃には、造形素材の形の変化に対して感情が注ぎ込まれるようになり、自分から積極的に紙などの素材に変化を加えるようになる。すなわち、この頃から周りの大人にも「作るという行為をはっきりと確認できる」ようになる。

例えば、バケツに水を入れているとすると、その水をさわって変化をつけようとしてかきまわして満足したり、お菓子の空き箱などを積み重ねたりすること、さらにそれを崩してみるなどの関係性を見つけ出そうとする時期である。

このことによって、形の機能性を学びはじめ、単調な遊びから広がる多様な造形活動の目覚めが始まっていく。1歳児は全体的に、「ものいじり」に最も強く関心を示す時期である。「ものいじり」は、単なる遊びで終わることなく、自分の支配できるものに向けた気持ちを発散させながら情緒を安定させ、同時に、感覚や知覚機能の発達を高める重要な時期である。その後、年齢とともに生活体験を基にした意識的な表現行為につながっていく。

4) 幼児の造形表現に活用できる様々な紙の種類

前述のように幼児が描いたり、作ったりする造形表現を展開していくために用いる紙素材は、現在、産業の発展を経て、おおよそ以下のような紙素材を選択していくことができる。

①画用紙

絵画用に作られた紙で発色や色の彩色がしやすい。適度な粗い面がある。

②色画用紙

絵画や造形活動のために作られた紙。現在、多様な色がある。

③ケント紙

紙にロールをかけてある緻密な紙。線描や図案のデザインに使用する。

④アート紙

グラビア用の印刷用紙。表面加工されており、平滑で筆跡が残りやすく、その効果を活かした絵を描くことができる。

⑤クラフト紙

丈夫なパルプ紙で、袋などに使用する。多くは茶系の色で耐水性がある。

⑥更紙

吸水性があり、変色しやすいが、安価な紙で多く使用する活動に向いている。

⑦構造紙

高級紙の模造としてつくられた紙で、安価である。協同製作の際に製作用紙として使用する。

⑧白ボール紙

再生紙を間に入れて、表面の白い紙と貼り合わせた厚紙で吸水性がある。

⑨黄ボール紙

黄色の厚紙で箱材に多く使用される。

⑩木炭紙

木炭のデッサンに使用する。こすっても手羽立たない丈夫な性質をもつ。

⑪地紋紙

表面を型押し加工し、キャンバス地などの様々な凹凸をつけた紙。

⑫ダンボール紙

大型の箱をつくることなどで使用され、丈夫であり、工作にも使えるが、絵を描く際にも大作の製作などができる。

⑬和紙

伝統的な技法を用いて、日本各地の風土の中で様々な和紙がつくられている。にじみやしみこみの強い版画紙である「奉書紙」、表面を平滑にし

て、しみこみやにじみを少なくした絵画用の紙である「鳥の子紙」、しみこみが強く、筆使いなどが活用できる「画仙紙」、幼児教育施設で多く使われ、しみこみがよく、安価な「半紙」、巻紙にされた和紙で、やや厚手でしみこみのよい紙で形状を利用して使う「障子紙」がある。⁵⁾

以上のような①～③の紙素材を活動内容やテーマに沿って選ぶことによって、充実した造形活動を検討してみたい。次に、いくつかの紙素材を具体的に活用して行った実践事例を考察していくことにする。

5. 紙の素材から発展する造形材料の視覚的媒体を通した表現効果に関する実践

1) 「描く」による表現を用いた造形活動

幼児の絵画は、線を描く素描から絵具などの着色まで多様な技法がある。水彩画では、ガッシュ、ポスターカラー、アクリル絵具が主であり、紙に用いることが多い。また、水彩の特性を活かしたにじみなどの他に、木材や絹、ダンボールなどにも塗ることができ、支持体の幅は広い。

水性の絵具を使う場合は、小学生の場合、水彩用筆を使うことが一般的であるが、幼児の場合は、綿棒、棒の先に綿やガーゼを丸く巻いて輪ゴムでとめたものは水彩筆よりも扱いやすいため、描画をしやすい道具となる。あるいは、描画筆は、身近にある自然素材として、木の枝などを使っても遊び心があり、面白い線を引くことができる。

その他に、手や足、もしくは全身を使ったボディペインティングも幼児の描画表現として、気候の良い夏などに盛んに行われる。水性という面では、乳幼児において、小麦粉や片栗粉、寒天を使って、水性絵具もしくは食紅を混ぜ、絵具にして感覚遊びを楽しむことも絵具の素材を経験するという意味では、大変意義がある。

油彩系の絵具は、油性マジックなどのペン、オイルパステル程度は幼児、小学生ともに用いるこ

とはできるが、油絵具の場合、水彩絵具に比べて、取扱いが難しく、専用のオイルやクリーナーを使う必要があり、油画を描く実技は、教育機関では中学生以上の場合が一般的である。

版画は、紙版画や木の葉っぱを使った版画遊びが手軽であり、水性系の版画絵具か水彩絵具を塗って代用することも可能である。小学校高学年においては、彫刻刀を使った木版画の機会も設定することによって、より緻密な表現につなげていくことができる。

水彩絵具を扱う場合においても、扱いになれていない幼児は、衣服を汚しやすいため、エプロンの着用や汚れてもよい服装で実践をすることが必要となる。また、絵具に抵抗感をもつ幼児も考えられるため、指導する側は、幼児の発達段階や普段の造形への関わりの様子を見ながら、取り扱いの配慮をしていきたい。さらに、実践を行う場が教室や野外であるかにもよるが、ビニールシートや新聞紙を敷くなどして、床に絵具がつかないように配慮することが必要である。

一方で、個人で行う絵画表現かグループやクラス単位で行う絵画表現かによって、導入や実践方法は変化していく。どちらの場合にしても、支持体の大きさや種類にも配慮しながら、それぞれの絵画表現を読み取り、個人個人の表現に寄り添った指導を進めていく必要がある。特に、グループで進める場合、個人の作品に比べ、製作部位がわかりにくいいため、各幼児の製作過程も大切にしながら、絵画表現への関わりを検討することが大切である。

幼児の場合、絵具の面白さや素材の感覚を大切にし、時には、既成の材料だけでなく、手作りの道具や木の葉、土などの自然から斬新な絵具を作るなどの試しみもできる。ところで、絵画の表現は、日常生活の中のあらゆることや物が題材となる。また、描画の方法も材料の基礎知識を学ぶことによって、自在に応用した実践をすることができる。

ところで、幼児が描く活動をする時、その対象は、「人の顔、人が何かの行動をしている場面（例えば、サッカーや水泳など）、動物、テーマパーク、野菜や花・木を主とした植物、季節感、遠足等の思い出、食べ物、何かのお話」などのイメージが描かれる。幼児が描くタイミングは、園での日常生活の中で展開される。

図3は、紙芝居を実演している様子であるが、幼児は、絵画を見た時に、絵画を読むという傾向が高く、鑑賞をしながらも物語の理解を読み解いていく特性をもつことが考えられる。

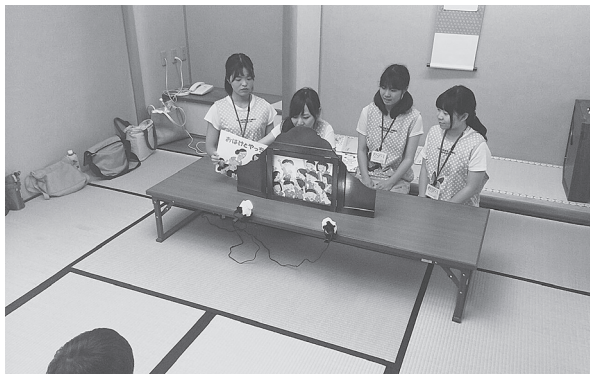


図3 保育士養成校学生による紙芝居の実演
(平成24年6月：前橋商店街ウォークラリーにて)

そこで、絵画を読むという幼児の傾向を活かした実践として、実際に紙芝居を描画し、物語を絵画にするという実践を計画した。ここでは、墨汁、色紙などを混合しながら、いくつかの実践を進めていった。

実践A：墨絵による民話の描画（平成24年11月）

ここでは、物語性があり、かつ身近なテーマとして高崎の民話を選び、画用紙に墨絵で描く実践を行った（図4）。

紙に墨で描くという行為は、中国から日本へ伝わった伝統的な描画技法でもあり、墨の濃淡を用いた色彩の空間表現も可能である。そのことを事前に学ぶことによって、墨のもつ味わいが民話とうまく融合することを想定し、実践を展開していった。

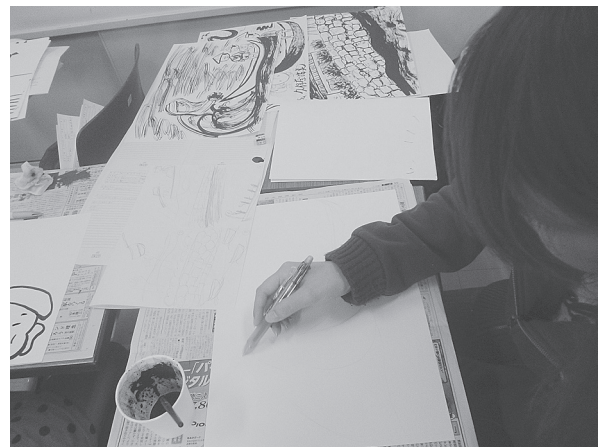


図4 高崎の民話を墨絵で描画している場面
(保育士養成校学生)



図5 高崎の民話を墨絵で描画した作品
(保育士養成校学生)

まず、墨で線描を進めた描画に沿って、アクリル絵具で色彩をつけ、全体的な調子を見ながら、民話の話の内容に登場する人物などの構成を組み立てていった。しかしながら、いきなり墨で描くということは最初に行う実践としては、大変難しい面もあるため、あらかじめ、コピー用紙に下描きやコマ割りをして、実践を進めていった。このことによって、白黒のモノトーンの世界から色彩のある紙芝居作品に発展させることに至った。



図6 高崎の民話を墨絵で描画し、着彩した作品
(保育士養成校学生)

実践B：墨絵による民話の描画（平成25年7月）

実践Aでは、保育士養成校学生による民話の墨絵を基にしながら、紙の表現を造形活動にしていた。次に、紙に墨絵を描き、色彩を「ちぎり絵」で表現する実践を行った。すなわち、紙に色紙で色彩をつけることによって、平面の中に立体的な表現を展開していこうとすることをねらいとした。

ここでは、実践Aと同じように群馬の民話を題材として、作品製作を行った（図7及び8）。

「ちぎり絵」は、ハサミの使い慣れていない3歳児でも、色画用紙をちぎる偶然性によって、色彩を考えることができ、なおかつ、思いがけない色彩構成を組んでいくことができると考えられる。



図8 高崎の民話を墨絵で描画し、「ちぎり絵」
で着彩した作品（5歳児）



図9 墨絵と「ちぎり絵」による紙芝居製作



図7 高崎の民話を墨絵で描画し、「ちぎり絵」
で着彩した作品（3～5歳児）



図10 墨絵と「ちぎり絵」による大型紙芝居製作

図7～10は、高崎市在住の親子で、父親と幼児を対象とした「平成25年度ライフアップ推進事業：子育て支援家庭教育充実講座・育メン講座」において、筆者が講師として行った「『描く』を楽しむ～作って遊ぶ手作り紙芝居～」(平成25年7月20日<土>10:00～12:00に開催)の実践の様子と製作した作品である。

講座当日は、8組の親子とともに、まずは、図7や8のような小さい作品を第1段階として製作した。導入として、講師がかつて製作した群馬県吉岡町の民話『鬼の又三郎』の実演を行い、その民話の内容を基にしながら、登場人物や情景を作品の中に描いて、色彩をちぎり絵で考えていった。

第2段階では、図10に見られるように、大型のダンボールをパネル状にして用意し、第1段階と同じ方法で製作することにした。大型になるほど線描をしていくことが難しくなるものの、父親との共同製作ということからも比較的、ダイナミックな作品製作につなげていくことができた。

参加者の事後アンケートを見てみると、紙芝居を描くことも墨で描くことも、大型作品の製作もすべて初めての体験であり、多少のとまどいがあったものの、出来上がって展示された作品の迫力や活動体験に対する表現の発散的要素が多く感じられる内容の記述があった。

実践Bで製作した大型紙芝居は、平成26年3月に開催された「育英短期大学アートフェスタ2014」(高崎シティギャラリーコアホール)にて、実演を行った(図11～14)。

「描く」という表現をこれまで、取り上げてきたが、その作品を鑑賞したり、実演したりしながら、どのような表現を受け止めていくことにつなげていくかについては、作品の製作を振り返る上でも重要な問題である。

このことは、自分の表現が他者に受け止められることによって、コミュニケーションに発展していく重要な循環経路であることが考えられる。

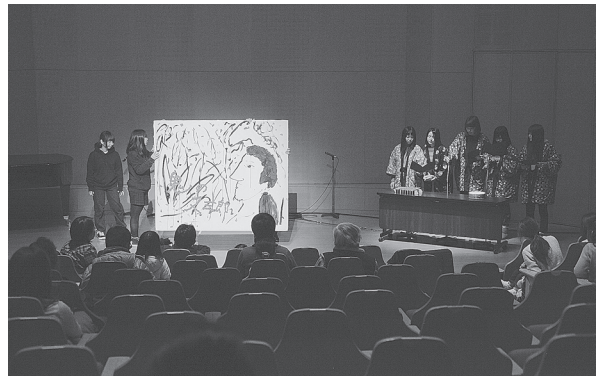


図11 大型紙芝居の実演の様子(表紙)



図12 大型紙芝居の実演(橋のある風景)

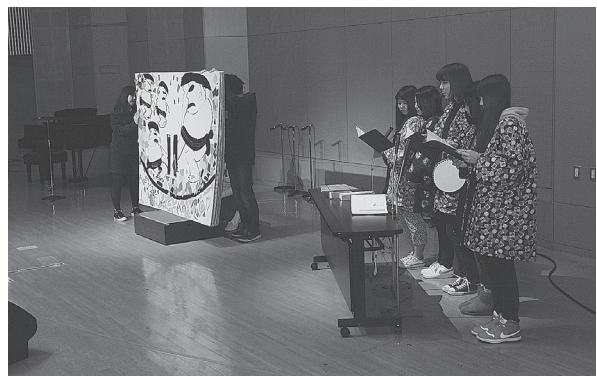


図13 大型紙芝居の実演の様子(保育士養成校学生による実演と演出効果による発表)

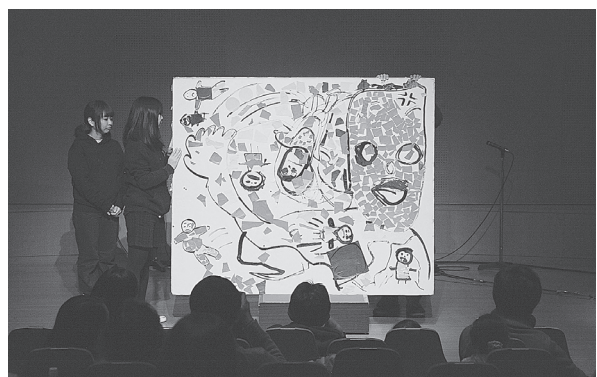


図14 大型紙芝居の実演(村の相撲大会)

このことについては、関連させながら、次の「作る」という表現行為においても検討していくことにしたい。

2) 「作る」による表現を用いた教育実践

「作る」という表現を考える時、現代は、ペットボトル、牛乳パック、お菓子の空き箱など、様々な「作る」につながる素材を手にすることが可能である。

さらに、木の葉や木の枝などの自然素材には、ドイツの「森の幼稚園」の取り組みに見られるように、世界的にも人間の感性を環境から養う保育実践が報告されている。一方で現在、テープや接着類なども豊富に開発されている。これらは、幼児の造形活動の中に何を取り入れるかを問われている時代でもあり、その背景を基に実践を展開していく指導者の豊かな造形活動への視点も大切になってきていることを意味している。

そこで、平面に描くという行為から、立体的な作品製作へ表現の関わりとなる実践を進めていく実践を考えてみたい。なお、この実践においても、紙という造形素材を用いながら、実践を考えていくことにしたい。

実践C：紙のオブジェ作り（平成26年度10月）

これまでの実践では、光沢の無い紙を用いた造形活動を進めてきた。そこで、実践Cでは、光沢のある紙を用いた実践を検討していくことにする。図15～17はポスターやカレンダーに使用される光沢紙を用いた造形活動において、オブジェを製作した実践作品である。

導入においては、10個程度の「紙の積み木」の製作を求め、それらを組み合わせるオブジェを作る設定とした。ただし、テーマは、季節が秋であったため、季節感のある「秋の形」にし、事前にスケッチブックにイラストや文章にして描き出してから製作を進めていった。

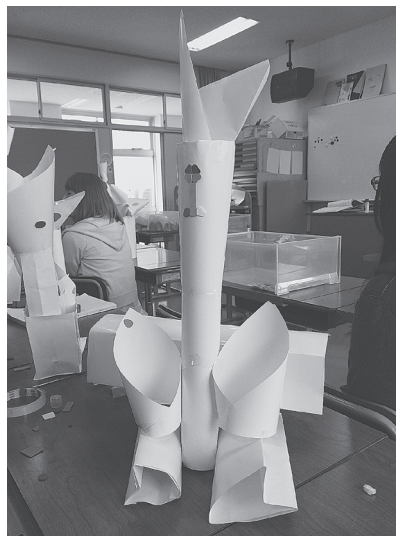


図15 紙のオブジェ作品（保育士養成校学生）

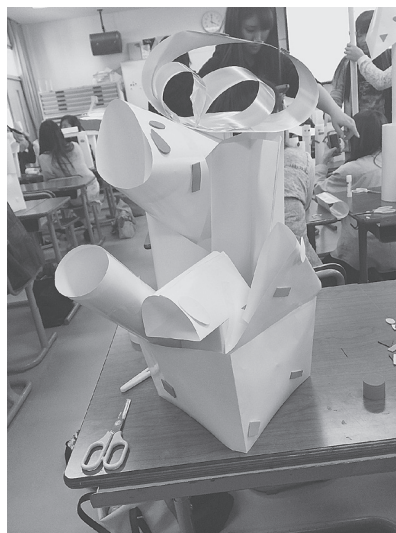


図16 紙のオブジェ作品（保育士養成校学生）

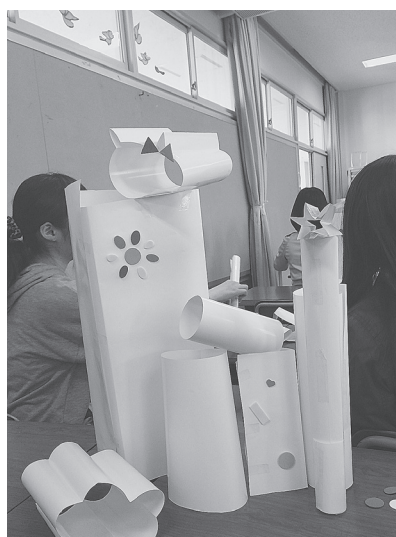


図17 紙のオブジェ作品（保育士養成校学生）

光沢紙を用いた造形活動においては、接着用のりを用いて色画用紙などで飾りつけしたり、形同士をくっつけたりしながら、オブジェ製作を進めることによって、立体的な表現の感覚をつかむことができたと考えられる。

実践D：紙の様々な姿を表現していく感覚遊び (平成24年7月)

紙の素材を思い浮かべた時に身近にある材料は、まず、新聞紙であろう。実践Cの光沢紙と異なる軽量性や加工の手軽さを用いて、幼児から大人まで、幅広い表現が可能である。

図18～27は、高崎市在住の親子で、父親とその幼児を対象とした「平成24年度ライフアップ推進事業：子育て支援家庭教育充実講座・育メン講座」において、筆者が講師として行った「心を開

放～親子で楽しむ造形あそび～」(平成24年7月21日<土>10:00～12:00に開催)の実践の様子と製作作品である。

講座当日は、親子16組が参加し、新聞紙を用いた造形活動(図18～21)の後、紙の積み木製作の説明(図23)を行い、第2段階となる紙を用いた積み木遊びの実践(図23)につなげていった。実践の最初に光沢紙を床に立つように加工し、その条件を満たす形を10個製作することを求め、参加者に製作してもらうこととした。

参加者は、星や丸、四角などの様々な形を検討し、柱状にしながら、親子のコミュニケーションの中から、紙の積み木を製作していった。また、最後に光沢紙を違った角度から見つめていくために、形をくり抜いて光を通す作品製作を行った(図23～25)。



図18 新聞紙を用いた造形活動(高崎市在住の親子20組)



図20 新聞紙の素材感にふれる活動(質感を楽しむ)



図19 新聞紙をちぎって見立てる活動(夏の形)



図21 新聞紙の素材感にふれる活動(集めて形を作る)



図22 光沢紙を用いた造形活動



図25 光沢紙を用いた造形活動（形を光と影で表現）

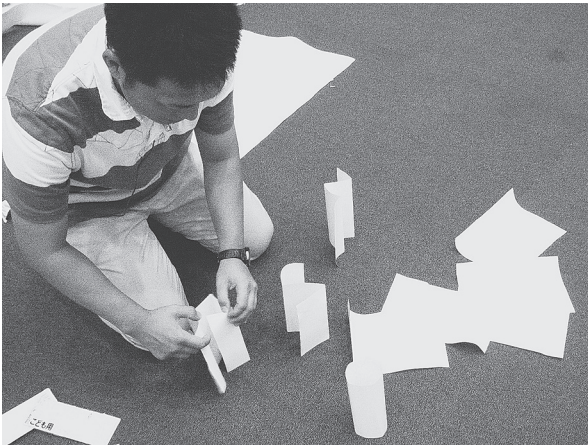


図23 光沢紙を用いた積み木作りの説明（筆者）



図26 光沢紙を用いた造形活動（形を光と影で表現）

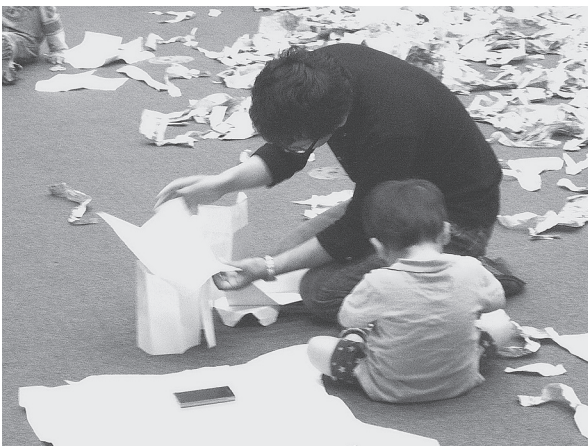


図24 光沢紙を用いた造形活動（紙の積み木作り）



図27 光沢紙を用いた造形活動（形を光と影で表現した作品）

実践Dの参加者のアンケート結果を見てみると、普段の家庭生活においては、なかなかできない活動を楽しみ、親子間のコミュニケーションの機会をもった時間の充実さが記述されていた。一方で、幼

児によっては、ハサミの使用が難しかったことや育メンである父親同士の交流を望む声も事後感想であったため、さらに、この点を再検討して、実践を計画していくことも必要であることが考えられた。

実践E：紙と言葉の表現による「立ち絵」の製作 (平成26年度10月)

これまで、紙を用いた造形活動において、いくつかの実践を見てきたが、ここでは、平絵紙芝居である立ち絵の製作作品とその発表方法について実践の組み立てを行った。図28及び図29は、育英短期大学桔梗祭の中で、図書館を会場として開催した発表の様子である。題目は、『日天さん月天さん』（資料1）に設定し、実演を行うことにした。

立ち絵の舞台は、様々な言い伝えがあるもの、おおよそ、図28や29のような形で舞台を意識して、実演されていたようである。

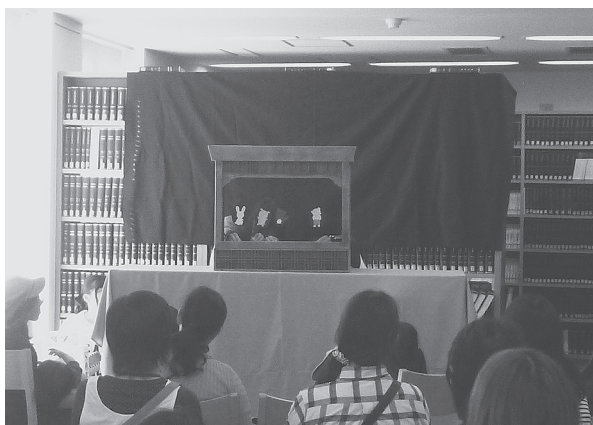


図28 立ち絵の作品と発表の様子（保育士養成校学生）



図29 立ち絵の作品と発表の様子（保育士養成校学生）

筆者らは、近年、紙芝居に関わる活動を進めてきたが、その中で、現在の紙芝居のルーツである立ち絵に着目し、実践Eの内容を進めてきた。紙を用いた作品は、現在のペープサートにつながる表現によって、言葉と組み合わせられることにおいて、紙の素材から、生命を感じる紙の人形に発展することが、実践経過を通して考えられた。

6. 全体的考察

これまで、紙の素材に着目しながら、表現につながる紙の実践や素材感を検討してきた。また、紙の素材を通して、「描く」「作る」という観点から、実践を計画し、紙素材と感性の形成、表現効果、その視覚的要素について、混合材料を含めた実践を進めてきた。

実践A、Bにおいては、墨絵や紙芝居の製作を通して、紙に「描く」という観点から、造形活動を行い、白い画面の中に黒い線が引かれていくことによって、空間表現に発展していく効果を確認することができた。また、描くという行為によって、幼児の絵の中にあるメッセージやイメージを客観的に受信することができる効果について、改めて確認することができた。

実践C、D、Eにおいては、「作る」という観点から、新聞紙や光沢紙を用いた感覚的な遊びや言葉を交えた立ち絵作品の製作につなげた。この実践では、他者とのコミュニケーションの成立や幼児の感性を立体的な表現から受け止めることについて、実践を通して見出すことができた。また、実践Cでは、紙と混合材料を組み合わせることから、立体的なオブジェ製作の実践を通じた感性と表現についての関連性を検討した。

さらに、実践Eにおいては、視覚的な要素について、言葉を用いながら、紙素材に生命観を含ませる表現効果について検討することができた。

これまで、述べてきたように、紙素材には、「描く」「作る」というアプローチによって、様々な人間の五感と感性の形成につながる実践活動

を進めることが可能である。今後は、さらに、伝統的な日本の紙やリサイクル紙的な素材感も関連させながら、紙素材のもつ視覚的媒体と表現効果についての考察を重ねていきたい。

注

- 1) 三田地真美, 「学校を変える教育ファシリテーション」, 『児童心理』4月号第63巻第5号, 金子書房, 2009, p. 124.
- 2) 津村俊充, 石田裕久, 『ファシリテータートレーニング』, ナカニシヤ出版, 2003.
- 3) 『保育者のための基礎と応用 楽しい造形表現』, 子どもの造形表現研究会, 圭文社, 2007, pp. 15-17.
- 4) 『幼児の造形—造形活動による子どもの育ち—』, 野村知子・中谷孝子編著, 保育出版社, 2002, pp. 23-43.
- 5) 『幼児造形教育の基礎知識』, 花篤實監修, 建帛社, 1999.

【資料1】

『日天さん月天さん』

(後ろから、うさぎ登場)

うさぎ：ぶたちゃんとたぬきちゃん、遅いなあー。

(たぬき、上手・舞台向かって右から急いで登場)

たぬき：ごめんごめん、遅くなって。

うさぎ：来ないかと思って、心配しちゃった。

たぬき：ごめんね。あれ、ぶたちゃんは？

うさぎ：それが、まだなの。

たぬき：どうしたんだろうね？

うさぎ：忘れたのかしら？

たぬき：そんなことないよ。ぶたちゃんが、となり村のお祭りに行こうって誘ったんだから。

うさぎ：そうね、もうちょっと、待ちましょう。

(上手から、ぶた慌てて登場)

ぶた：大変だー、大変だー！

うさぎ：ぶたちゃん、あわててどうしたの？

ぶた：た、た、大変なんだ！

たぬき：大変なのはわかったけど、何が大変なの？

ぶた：となり村に行く途中のおとぎ峠に怖い鬼が出るんだって！

うさぎ・たぬき：えー、鬼～・・・本当？どうしよう・・・、こわいよ～・・・。

ぶた：となり村のお祭りに行きたいのに・・・鬼が出るんじゃ・・・。

たぬき：でも、行きたいよね。

ぶた：何か、名案ある？

(間)

うさぎ：あ、そうだ！森の魔法使いのお婆さんのところへ行って相談してみない？

たぬき：そうだ、お婆さんなら、きっと助けてくれるよ。

全員：そうしよう！そうしよう！

うさぎ：皆で森のお婆さんのところへ行きましょう。

(全員、上手へ退場)

(下手から、3人登場)

うさぎ・たぬき：ごめんください。

ぶた：お婆さんいますか？

(上手から、お婆さん登場)

お婆さん：はい、はい、どなたですか？

うさぎ・たぬき・ぶた：こんにちは。

お婆さん：こんにちは、うさぎちゃん、たぬきちゃん、ぶたちゃん。きょうは、どうしたの？

うさぎ：きょう、となり村でお祭りがあるでしょ。

お婆さん：そうそう、さぞかしにぎやかでしょうね。

たぬき：でも、おとぎ峠に鬼がいて、ぼくたち行くことができないんです。

お婆さん：それは困ったねえ。(間) そうだ「魔法のおまじない」をとこなえたら！

うさぎ・たぬき・ぶた：「魔法のおまじない？」

お婆さん：姿が見えなくなる「魔法のおまじない」ですよ。

ぶた：それって、むずかしいの？

お婆さん：とっても簡単だから、すぐ覚えられますよ。

うさぎ：お婆さん、ぜひ教えてください。

お婆さん：いいかい、自分が姿を消したい時には「日天さん、月天さん」と大きな声で言いなさい。

うさぎ：それだけ？

お婆さん：それだけ！うさぎちゃん、やってみるかい？

うさぎ：はい！「日天さん、月天さん！」(太鼓「ボン」・裏返す)

本当！私ってすごい！消えたわ！

たぬき・ぶた：すごい！うさぎちゃん、全然見えない！

お婆さん：たぬきちゃんもやってみよう！

たぬき：はい！「日天さん、月天さん！」(太鼓「ボン」・裏返す)

消えた！すごい！

お婆さん：今度は、ぶたちゃんの番ですよ！

ぶた：はい！「日天さん、月天さん！」(太鼓「ボン」・裏返す)

わーい、消えちゃった！

うさぎ：でも、お婆さん、私たちずーっと消えたままなの？

お婆さん：そうそう、元に戻る、おまじないを覚えてあげなくてはね。そうしないと、8年間は消えたままになってしまうからね。

うさぎ：8年も消えたまま！？

たぬき：それは、やだー！

ぶた：お婆さん、戻り方を教えてください。お願いします。

お婆さん：はい、はい。戻るときは「おとぎ峠に星が出た！」と大きな声で言うのよ。うさぎさんからやってみよう。

うさぎ：「おとぎ峠に星が出た！」（太鼓「ボン」・表返す）

お婆さん：はい、うさぎちゃん、よく出来ました。次はたぬきちゃんの番ですよ。

たぬき：「おとぎ峠に星が出た！」（太鼓「ボン」・表返す）

お婆さん：じょうず、じょうず。では、ぶたちゃんね。

ぶた：えーと、えーと。「・・・おとぎ峠」だっけ。

うさぎ：おとぎ峠に星が出た！だよ。

ぶた：「おとぎ峠に星が出た！」（太鼓「ボン」・表返す）

お婆さん：みんな、よくできました。

うさぎ：これで、鬼が出て怖くない。

たぬき：となり村のお祭りに行けるね。

ぶた：お婆さん、ありがとう。

うさぎ・たぬき：ありがとう。

お婆さん：行ってらっしゃい。私も後から行くからね。

うさぎ・たぬき・ぶた：向こうで、待ってるね。お婆さん、本当にありがとう。（下手へ退場）

お婆さん：よかった、よかった。私も支度しようかね。（上手へ退場）

（中央に木を立てる、後ろに鬼。「おとぎ峠」の立札は木の右に。）

鬼：うおー！おとぎ峠に住んでいる、怖い鬼だぞ！きょうは、向こうの村でお祭りがあるから、子どもたちがたくさん、ここを通るはずだ。いつものように、脅かして、泣かせてやろう。それに、おれは、魔法が使えるんだ。見せてやろう！

「どろどろ、もくもく、どろどろ、もくもく、とりゃ！」（太鼓「どろどろどろ、ボン」・裏返す）

鬼：どうだ、おれ様の力をみたか！すごいだろう！！

あ、向こうから、子どもたちがやってくる。元に戻らなくちゃ。

「そうたら、そうたら、みーず、みず！」（太鼓「ボン」・表返す）

鬼：あの木のかげに隠れなくては・・・（木の後ろに回り込む）

（上手から、うさぎ登場）

うさぎ：よいしょ、よいしょ・・・ふー疲れた。（立札を見て）ここが、おとぎ峠か・・・鬼が出るっていったけど・・・

（太鼓どろどろどろ・・・）

鬼：そこにいるのは、誰だ！鬼だぞ！食べてやる！

うさぎ：わー、こ、怖いよー！魔法のおまじないは何だっけ？・・・「に、に、日天さん、が、が、月天さん！」（太鼓「ボン」・裏返す、点々うさぎになって鬼の前を通り抜け、下手へ退場）

鬼：な、何だ、あの点々は？気味が悪いな。あっちへ行ったようだな。よかった。・・・

お、向こうから、うまそうなたぬきがくるぞ。

（木の後ろに回り込む）

（上手から、たぬき登場）

たぬき：よいしょ、よいしょ、ふー。やっと、おとぎ峠にたどりついた。このあたりだよ。鬼がでるといのは・・・

鬼：「どろどろ、もくもく、どろどろ、もくもく、とりゃー！」（太鼓「ボン」・裏返す）

鬼：うおー！

たぬき：ヒュー、怖いよ！助けて！

鬼：食べちゃうぞー！

たぬき：えーと、えーと、・・・「月天さん、日天さん！」（太鼓「ボン」・裏返す。逆さの絵になり、大きく鬼の前を飛びながら、下手へ退場）

鬼：何だ、あれは？頭で跳ねてる・・・しまった。また、とりにがしたか！・・・おや、今度は、おいしそう、ぶたがやってくるぞ。このままでは、大きすぎる。元に戻らなければ。

「そうたら、そうたら、みーず、みず！」（太鼓「ボン」・表返す。木の後ろに回り込む）

（上手から、ぶた登場）

ぶた：よいしょ、よいしょ、ブヒ、ブヒ。あー疲れた・・・。ここが、おとぎ峠だよ。ということは、鬼がいるってこと！？

鬼：その通りだ！ガオー！！！！食べちゃうぞー！

ぶた：ヒュー！助けて！・・・何だっけ・・・えーと、えーと、「日天さん、日天さん！日天さん、日天さん！」（太鼓「ボン」・裏返す。下半身のぶたになる。鬼の前を通過して、止まる）

鬼：何だ、これは！化け物か～！

ぶた : に、逃げろ！(大きく上に跳ねて、走って下手へ退場)

鬼 : までー(追いかけて、下手へ一端退場)
(下手から、鬼、登場)

鬼 : また、取り逃がしてしまった。あいつら魔法使いのお婆さんに何かおまじないを覚えてもらったに違いない。・・・おっ！飛んで火に入る夏の虫！お婆さんがやってくるな。つかまえて、とっちめてやる！よーし木の陰にかくれよう。
(木に隠れる)

お婆さん: どっこいしょ！やっつ、おとぎ峠についた。

鬼 : ガオー！(太鼓「どろどろどろ」)

お婆さん: (全く驚かず、落ち着いて) あれ、まあ、鬼さんじゃないですか。こんにちは！

鬼 : (つられて言う) こ、こ、こんにちは・・・。

(正気に戻り) 何がこんにちはだ！やい、婆さん。うさぎと、たぬきと、ぶたに、変なおまじない教えただろう！

お婆さん: 変なおまじない？(間) ああ！「魔法のおまじない」のことかい？

鬼 : それだ！あいつらが、むにゃ、むにゃ、言うとおまじないの格好になったぞ。おれ様も魔法を使うが、見た事のない魔法だった。

お婆さん: おや、鬼さんも魔法が使えるのかい？見せてくれますか？

鬼 : 見せたら「魔法のおまじない」を教えてくださいか？

お婆さん: もちろんですとも。

鬼 : よし。みせてやる。ようく見とけよ！

お婆さん: はい、はい。

鬼 : 「どろどろ、もくもく、どろどろ、もくもく、とりゃー！」(太鼓「ポン」・裏返す)

お婆さん: ほー、すごいねー！(わざとらしく言う)

鬼 : さー、約束通り「魔法のおまじない」を教えろ！

お婆さん: その前に、元の大きさにしてもらえるかい？

鬼 : もちろんだとも！「そうたら、そうたら、みーず、みず！」(裏が黒の立ち絵とすり替える。
太鼓「ポン」・表返す)

お婆さん: すごいねえ！(さも感心したように)

鬼 : すごいだろう。さあ「魔法のおまじない」を教えろ！

お婆さん: はい、はい。簡単ですよ。「日天さん、月天さん」と大きな声で言えばいいんです。

鬼 : わかった。「日天さん、月天さん！」(太鼓「ポン」・裏返して黒の立ち絵にする)

お婆さん: うまい、うまい！

鬼 : おー、消えた、消えた！全く見えない。

お婆さん: はい、とてもよく出来ました。さようなら！

鬼 : 婆さん、ちょっと待て！どうやって元に戻るんだ？

お婆さん: お前のような悪い鬼は、消えたままにいるのが、ちょうどいいよ！

鬼 : えー、そんない！お願いだから教えて下さい！

お婆さん: だめだね。8年間、反省おし！

鬼 : えーん、えーん！8年も消えたままなんていやだー！お願いです。教えて下さい！

お婆さん: 泣いたってだめだね。今までの報いです。

鬼 : えーん、えーん！(後ろに消える。木、立て札も後ろに消える)(上手から、うさぎ・たぬき・ぶた・お婆さん登場)

うさぎ: お婆さん、ありがとう！

たぬき・ぶた: ありがとう！

お婆さん: おやおや、みんな、なんて格好だい。でも、鬼から逃げられてよかったね！さあ、元の姿に戻れるかな。「魔法のおまじない」は？

うさぎ: 「おとぎ峠に星がでた！」(太鼓「ポン」・表返す)

たぬき: 「おとぎ峠に星がでた！」(太鼓「ポン」・表返す)

ぶた : 「おとぎ峠に星がでた！」(太鼓「ポン」・表返す)

うさぎ・たぬき・ぶた: やったー！やったー！(嬉しそうに)

お婆さん: さあ、さあ、みんなでお祭りに行きましょう！

うさぎ・たぬき・ぶた: そうしよう！

全員: 鬼もいないし、お祭りにもいける。うれしいな！うれしいな！

(言いながら、嬉しそうに、全員、下手に退場)

<原作 永柴孝堂 を一部脚色>

